

主 題：主にある家庭生活②：夫と妻

聖書箇所：コロサイ人への手紙3章18－19節

テーマ：神様から夫に与えられた責任とは何か？

先週から私たちはタイトルにもあるように“主にある家庭生活：夫と妻”に関して、コロサイ3章、特に18－19節を中心に学び始めました。その続きをきょうも一緒に考えてみます。まずはいつものようにみことばをお読みしますので18節からそれぞれよく見てください。

コロサイ3：18－19

「:18 妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。:19 夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいけません。」

さて、きょうの内容に入って行く前に、前回最初に触れたことを少し思い返してみてください。みことばの教えている家族の姿というものを改めて考えていく前に、二つのことを皆さんに覚えてくださいとお願ひしました。

一つ目は、「私たちは最も親しい関係においても主の栄光を現そうとする」ということでした。私たちがみことばを見たときに、みことばは、私たちが個人的に、また神の家族の中においても主の栄光を現していくだけではなくて、最も身近な肉の家族の中においても同じように主の栄光を現していくことを求めています。先週「私たちはひとりの時や兄弟姉妹の前であれば、外ではいろんなことをして上手に自分自身を隠すことができます。でも、ありのままの自分の姿が現れる親しい家族の前や、夫婦や親子関係の中において、主の栄光を現す者としてますます成長し続けているかどうかということを、みことばから一緒に考えてください。」と言いました。きょうも同じです。ぜひ、みことばから自分自身のこととして考えてみてください。

二つ目は、「私たちはデザイナーの意図に従おうとする」ということでした。言い換えると、家庭のことであれ、結婚や子育てのことであれ、私たちはそのすべてを創造されたお方、創造主なる神様が最初に持つておられたご計画に従っていくということが大切でした。ご存じの通り、悲しいことに今私たちが周りを見渡してみれば、そのデザイナーが最初に意図したものは全く異なるものであふれかえています。その結果、家庭の中やさまざまな関係の中で、いろいろな問題が生じるようになったのです。私たちの責任は、創造主が最初に意図したものに目を留めることです。それを正しく理解することです。そしてそれに従い続けていくことです。ですからぜひきょうも自分自身に問いかけてみてください。神様は初めにいったいどんな意図でもってこの関係を造られたのだろうか。そして、果たして自分自身は今その神様の意図に沿っているのだろうか。

先週私たちは、夫婦間における妻の責任、特に“妻が夫に従う”ということについて学びました。今回はいよいよ夫の番です。ただ妻の皆さん、やっと私たちの番が終わった、ではなくて、ぜひ自分自身のこととして考えてみてください。皆さんのかしらである夫は、みことばからどんな責任を与えられているのか、助け手である皆さんはそれをよく知っていることが大切です。その働きを助けようとするのです。ですからぜひ自分のこととして、夫はどんな責任を負っているのかをみことばから見てください。「私は結婚していません。」と言われる方もいます。そんな方も同じです。男性であって、みこころであれば結婚するなら、ここで私たちが見ていく夫の姿というのは、皆さんが目指していくべき姿になります。でもこれから見ていく“愛していく”ということは、結婚してからスタートするものでもありません。みことばははっきりと、愛していくということをすべての人に求めていました。ですから、神様が求めている“愛”とはどういうものなのかをよく考えてみてください。女性の皆さんも同じで

す。みこころであればどのような男性を求めるべきなのかも、私たちはみことばからはっきりと見て取ることができます。ですからすべての人に大切なみことばを、特に妻に対する夫に注目しながら、きょうは考えてみたいと思います。

○夫婦間における夫の責任：妻を愛すること 19節

もう一度19節をよく見てください。夫に対する責任がはっきりとこう記されていました。「夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいけません。」夫に与えられていた責任はさっきも言いましたが、シンプルに“妻を愛する”ということでした。この世界のすべてを創造された神様は、夫婦間において、妻には“夫に従っていく”ということ、そして夫には“妻を愛していく”ということ、その異なる大切な務めを与えておられたのです。それがすべてのデザイナーであられる知恵ある神様の、創造主のご計画でした。

立ち止まってよく考えてみましょう。そもそも、夫が妻を愛するというのは、具体的にどんな夫の姿や態度のことを表すのでしょうか？と言うのも、先週見た“従うこと”とは違って、この“愛する”ということ自体は、現代社会において、ある意味ごく自然なものとして人々の間で捉えられています。ネットを調べてみると、“結婚の決め手ランキング”といったものも存在しますが、その上位の理由にもこんなものがあります。相手が自分を誠実に一途に愛してくれる人だと感じた。そんな相手の愛情や行為というものが挙げられています。また夫の愛の必要性を取り扱う本や記事も数多く存在します。ですからこのように考えると、夫が妻を愛するということが自体に関しては、確かに多くの人が熱心に求めているのです。夫に対してそれが望まれてもいます。でも多くの人がそのように考えるからこそ、この“愛”に関して、同時にさまざまな間違っただけの考えも生まれているのです。ここでみことばが「妻を愛する」と宣べているとき、これはいったい何を意味しているのでしょうか？果たして私たちが今持っているその理解というのは、この世の考えでしょうか？それともみことばに沿ったものでしょうか？この世が考えている愛ではなく、神様の求めている愛を実践する者として、果たして今歩んでいるのでしょうか？

この“妻を愛する”という重要な責任を今回改めてきちんと理解するために、きょうは三つの点から一緒に考えてみたいと思います。一つ目は、妻を愛するというのはどういうことなのか——その意味についてです。二つ目に見ていくのは、妻を愛するというのはどのようなものなのか——その模範についてです。そして三つ目に見るのは、妻を愛するとは何のためなのか——その目標についてです。意味について、模範について、そして目標について、それぞれ順番にみことばから考えてみましょう。

1. 意味：“妻を愛する”とはどういうことなのか？

では最初に意味から考えてみましょう。妻を愛するとはどういうことなのか、もう一度みことばに注目してください。19節のことばを通して、私たちは大切なものを少なくとも三つ見て取ることができます。

まず一つ目に見て取れるのは、パウロはこの箇所、妻に続いて夫に対しても「夫たちよ。」と複数形で呼びかけていました。19節は「夫よ」ではなく「夫たちよ。」と複数形で呼びかけられていました。言い換えれば、この“妻を愛する”という責任は、特定のひとりの人へのみ当てはまるものではないということです。結婚しているイエス・キリストを信じているすべての夫に対して求められていたことでした。

二つ目に見て取れるのは、ここで登場している「愛しなさい」と「つらく当たってはいけません」というこの二つの動詞には、どちらも継続を表す現在形の命令が用いられていました。皆さんはもうご存じでしょう。言い換えれば、ここで言われている責任というのは、夫にとって一度限りのものでも、時々成すものでもない、ということでした。また同時に、これは夫に対する単なる提案がなされているのも、勧めがなされているのでもありませんでした。“妻を愛する”ということは、夫が継続的に、そしてみずから進んで行っていく責任。夫にとっての生き方そのものでした。

そして最後三つ目に見て取れること、それは、今私たちが見たこの二つの動詞にはそれぞれ大切な意味が含まれていました。よく理解する上で一つ一つ考えてみます。まず前者の「愛する」ということばですが、これにはもともと「アガペー」というギリシャ語が用いられていました。聞いたことあるの方が多くでしょう。そして皆さんならご存じかもしれませんが、「愛」と訳すことのできるギリシャ語はこれ以外にも存在しています。一つは、家族や親子間における愛を表す「ストルゲー」というものもあります。それだけではなく、夫婦間における肉体的、性的な感情や愛を表す「エロス」というものもありますし、また兄弟や友人間の温かい愛情や友情を表す「フィレオ」といったことばもあるのです。どれも愛と訳すことができることばでした。でも、パウロはそれらを使いませんでした。ここで使われていたのは「アガペー」だったのです。つまり、妻に対する夫の愛というのは、単なる恋愛感情とか、温かい愛情、友情、好意を抱くこと、それ以上のものだということです。そしてさらに言うなら、このアガペーの愛というのは、相手のために自分をささげようとする意志を伴う犠牲的な愛を表していました。マッカーサー先生もこの愛について次のように説明しています。「多くのクリスチャンを含め、ほとんどの人は愛を心地良い感情、温かい愛情、恋愛や情欲といった観点からしか考えていません。…アガペーの愛の最高の物差しであり模範は、神の愛です。『神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。』愛は何よりも犠牲的です。愛は他者のため、たとえ自分のことを全く気にかけず、自分を憎んでさえいるかもしれない他者のために、自分自身を犠牲にすることなのです。」（ジョン・マッカーサー）勘違いしてほしくないのは、妻に対する感情がいっさいないという話ではありません。むしろ深い愛情を抱いています。でも、そんな自分自身の感情や気持ちに、夫の妻に対する態度は左右されないということです。夫の愛というのは、感情ではなくて、みずからの意志に基づくものでした。それがアガペーの愛でした。だからこそ、良い時であろうが悪い時であろうが、示す愛は同じでした。たとえ妻が自分の愛に値しないと思える状態にあったとしても、すべての夫はみずから進んでそんな妻の必要さえ満たそうとするわけです。犠牲を払って喜んで、神様が自分に与えたその妻の最善を果たすために愛を示そうとするのです。それが、ここで言われているアガペーの愛でした。「妻を愛しなさい」と。

そしてこれに加えてもう一つ、パウロは別のことばも用いていました。「つらく当たってはいけません」の「つらく当たらない」ということばです。もともとこのことばには、「苦々しい思いをさせる」とか「いらだたせる」といった意味が含まれています。興味深いのは、このことばは新約聖書の中で全部で4回登場しますが、今私たちが見ているこのコロサイの箇所を除けば、ほかはすべて黙示録の中に出てきます。そしてその黙示録では、このことばは「味が苦いこと」や「腹が苦くなること」を表現するのに用いられているのです。例えば黙示録10：9－10にはこのように記されています。「：9 それで、私は御使いののところに行って、「その小さな巻き物を下さい」と言った。すると、彼は言った。「それを取って食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」：10 そこで、私は御使いの手からその小さな巻き物を取って食べた。すると、それは口には蜜のように甘かった。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。」と。皆さんも苦い食べ物を口にしてそして苦しんだ経験はありません？私は今でも覚えています。家に隠してあったココアがありました。その隠してあったココアをこっそり楽しみにしながらコソコソして一口飲んだ瞬間、それが無糖だったときのあの苦さ、それはもうあまりにも苦すぎて続けて飲めるものではありませんでした。非常に後悔しました。でも加えて大変だったのは、その苦さというのは、一瞬でなくなってしまうものではなく、口の中に嫌な感じを残し続けていたのです。苦い物を食べたことがある皆さんの経験上、その不快な口の中に残し続けるような物を喜んだりはいないでしょう。それと同じように、みことばは、そういった苦い状態に夫は妻を置いてはならない、と宣べているのです。どんなときも夫が妻につらく当たって、苦々しい思いやいらだちを抱かせ続けることがないようにと求めていたのです。

少し自分自身の歩みを振り返ってみてください。これまでもおそらく夫婦間において、特にどちらかのふるまいやことばが原因となって、小さな不満を覚えるような場面は多々あるかと思います。罪を持っている者同士が一つ屋根の下で生活をともにしていれば、時に摩擦が生じてささいな争いが起こることもあるでしょう。ではそんなとき、特に夫の皆さんはどのようにふるまおうとしてきているでしょうか？ みことばが求めているように、妻につらく当たるのではなくて、たとえ妻に非があったとしても変わらず愛を示そうとしてきたでしょうか？それとも、その時覚えた怒りや憤りのままに接し、心の内に苦い思いを抱かせるようなことをしてきてはいないでしょうか？間違いなく言えるのは、もし夫の愛というものがみずからの意志に基づくものではなくて、ただ自分の感情とか妻のふるまいに左右されるものだとしたら、そこにはおのずと問題は生じるようになるでしょう。妻が先に自分をいらだたせたから、自分も同じように扱っても当然だ、とかしらである夫がそのようにふるまえば、始めはささいなすれ違いだったものが大きな争いへと変わっていくかもしれません。その関係の中に、苦味というものが残り続けてしまうかもしれません。みことばは、それをよしとはしませんでした。その解決策を与えていました。「夫は妻につらく当たるのではなく、変わらずに愛を示しなさい。」それがみことばが教えてくれていたことでした。「つらく当たってはいけません。」と。こうして相手のためにみずから自分をささげようとする、そんな意志を伴った犠牲的な愛をもって妻を愛していくというのが、家庭において夫に与えられた責任でした。それが、結婚を初めに定めたその神様が持っておられた夫のあるべき姿“愛する”ということでした。

2. 模範：“妻を愛する”とはどのようなものなのか？

続けて二つ目に考えたいのは、模範についてです。意味を見ましたが、さらに詳しく今度は妻を愛するとは実際にどのようなものなのか、その基準となる姿をみことばから考えてみましょう。そしてそのために先週も見たエペソ5章を見てください。特に25-27節から、夫が見倣うべき最高の愛の模範を二つ見てみたいと思います。まず25節に一つ目の模範がこう記されていました。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」「夫たちよ。…あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」これは同じことが言われていました。でもその間に最高の模範が描かれていたのです。

1) キリストの自分を与える愛

一つ目に見倣うべき最高の模範、それは「キリストの自分を与える愛」でした。このようにみことばを見ると、みことばは漠然としていませんでした。それぞれが思い描くような自分勝手なかたちで夫は愛を示そうとするのではなかったのです。そうではなく、キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、夫は自分の妻を愛そうとするのだ、というわけです。

では、いま一度考えてみてください。キリストが教会を愛したその姿、ご自身をささげられたその愛というのは、いったいどのようなものだったでしょう？考えてみれば神の御子であるイエス・キリストが人としてこの地上に来られた時、この方は自分に何が待ち受けているのかをご存じでした。知らなかったわけではありません。すべてを当然知っておられたのです。人々にこれからののしられ嘲られるということも、石やむちで打たれるということも、最後には十字架にかかるということもご存じでした。罪人に救いの道を備えるためご自身が苦しみ死ななければならないということも初めから知っておられたのです。しかしこの方はすべてを知っていてなお、それでも喜んでご自分をささげられました。本来ならまことの神様であるこの方こそ、すべての者から仕えられるべき存在でした。でもその権利を自分から主張することではなく、かえってみずから進んでへりくだり、人に仕える者となり、十字架の死にまでも従われていったのです。みことばはこう教えてくれていました。ピリピ2：6-8にこう書いています。「：6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、：7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、：8 自分を卑しく

し、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」と。また、そのイエス様ご自身がこうも言われていたのです。マルコ10：45で「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」と。このようなみことばを見ると、まさにキリストの愛はすべてを与える愛でした。

そして皆さんに気づいてほしいのは、私たちがこの世で「愛」と言うとき、多くの場合私たちは見返りを求めます。ましてや相手にいろんなものを与えれば与えるほど、それに伴った見返りを求めます。でもみことばを見てみれば、キリストはそうではありませんでした。この方は仕えられることを期待して仕えたわけではなかったのです。この方は本来仕えられるべき存在にもかかわらず、喜んでみずからご自身をささげられました。自分自身のすべてを与えておられたのです。そして感謝なことにそんな犠牲的な愛を私たちも受けました。もちろんこれは私たちがその愛に値したから受けたものではありません。生まれながらに罪人であった私たちには、罪の赦しより、罪のさばきこそがふさわしい者でした。もし神様が本来私たちに値するものをそのまま与えられるお方であれば、赦しではなく御怒りこそが当然の者でした。でもそんな愛など全く値しない者に対して、ただ恵みによって、主はご自分を与えてくださったのです。考えても理解できないほどすばらしいものですが、感謝だと思いませんか？神様が私たちをご覧になって「こんな高慢でこんな悪にも満ちあふれているような者にあわれみなど示さないでおこう。」と言われてもおかしくありませんでした。「何度言っても逆らい続けるような、そんな頑なな者にはもう恵みを示さないでおこう。」と言われても当然でした。逆らう敵としてのふるまいを止めて降伏した場合は、仕方なく赦しを与えようとすることもできました。でも、そうはなさらなかったのです。そして皆さん、もし神様の愛の基準が、私たちの行動や私たちの立場と、私たちに基づくものであるなら、私たちにはいっさいの希望などなかったということです。神様の愛が私たちに基づくものであれば、私たちには何もありませんでした。でも感謝なのは、神様はまだ私たちが罪人であった時に、私たちがまだ敵であったその時に、キリストが私たちのために死んでくださったことによりご自身の愛を明らかにしてくださったということです。キリストはみずからの意志で十字架にかかってくださり、ご自分のいのちをささげてくださったということです。

いったいどれほど大きな犠牲をこの方はみずから払ってくださったのでしょうか？どんなに値しない私たちのために大きなものをささげてくださったのでしょうか？そしてそんな愛を私たちが受けたのなら、これは夫だけではありません。受けたひとりひとりはどうのようにして周りに愛を示そうとするのでしょうか？ご自身のいのちをささげてくださった、その犠牲を払った愛を受けたのなら、私たちはどんな犠牲を払ってこの愛をもって神様に仕え、人々に愛を示そうとするのでしょうか？そして何より、夫はどんな犠牲を払って妻を愛そうとするのでしょうか？果たしてそんなキリストの犠牲的な愛を日々実践しようとしているのでしょうか？自分自身の愛というものを考えるとき、みずから進んで相手に自分自身を与えようとしているのでしょうか？それとも相手の状況や相手の立場にいつも左右されてしまうようなものではないのでしょうか？

確実に言えるのは、もし夫の愛が相手の何かに基づくものになっているのだとしたら、その愛は私たちが受けたものではないということです。キリストが私たちに示してくださった愛ではないということです。またそんな愛に固執し続けているのなら、相手の何かに基づく愛であるのなら、簡単に消え去ってしまうのだともいうことです。この世はそのように考えていたりします。例えば夫が妻の美しさや妻の魅力、そういったものに愛を示しているのだとしたら、その魅力がなくなってしまうとすぐにその愛も失われていってしまいます。でも、もし私たちの示す愛というものが、私たちが神様から受けた変わらない愛に根ざしているのだとしたら、妻に対する愛というものもどんなときも変わることはないでしょう。ひとりの註解者はこんなふうに言っていました。「キリストが愛するように愛するとは、他者がどのような人であるかということに左右されるのではなく、私たちがキリストにあってどのような人

であるかということに完全に拠るのです。」と。だからこそ皆さん、忘れないことです。夫が妻を愛していくというのは、妻が何か、ではありません。ただ妻を愛するということが神様から与えられたみこころであって、何より私たち自身が値することのないその犠牲的な愛をキリストにあって受けたからです。その愛が私たちのうちに生きているからです。キリストの模範から目を離さないことです。ご自身をみずから進んで与えてくださったその最高の愛というものを私たちが味わったから、だからその同じ愛でもって喜んで妻に自分自身を与えようとしていく、それが一つ目に見倣うことのできる最高の模範でした。

2) キリストの聖さを生み出す愛

そして次に二つ目の模範をエペソ5：26－27で見て取ることができます。このように26節は続いていました。「:26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、:27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」二つ目に見倣うことのできる最高の模範、それは「キリストの聖さを生み出す愛」でした。どういうことかということ今私たちは25、26節を続けて見っていますが、パウロが25節で宣べていた「キリストが犠牲的な愛で教会を愛したこと」、それがいったいなぜだったのかという目的を26節で明らかにしていました。キリストがそうされたのには、ある目的があったからです。簡潔に言うと、それは「教会が聖く聖なるものとなっていくこと」でした。ご存じの通り、キリストを信じ救われて、神様によって罪を洗い流され、神様の前に義とされた者はもう聖なる者とされたのです。でも聖なる者にされたらそれですべてが終わり、ではありません。みことばはますますその者がキリストに似た聖い者へととなっていくことを続けて求めていました。ペテロもこう口にしています。Iペテロ1：15－16に「:15 あなたがたを召してくださった聖なる方になって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。:16 それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならぬ」と書いてあるからです。」とはっきり書いていました。「聖なる方になってあらゆる行いにおいて聖なる者とされていなさい」と。夫にのみ求められていることではありません。これも同じです。すべての信仰者にとって聖なる者として、救われた者はますますキリストに似た者へと変えられていくことが求められていました。既婚であれ未婚であれ、関係ありません。キリストを愛している者であればだれであろうとキリストをますます知って行って、キリストとともにますます歩み、そしてこの方に倣って聖であろうとするわけです。キリストはご自身のその大きな愛のゆえに、そんな聖さを教会に望んでおられました。

そしてこれと同じように夫婦関係において、夫は妻を心から愛しているがゆえに、妻の聖さを願って、それに役立つことを追い求めていこうとするわけです。キリストが教会の聖さを求めるように、夫は愛する妻がますますキリストを知って、キリストに喜びを見出して歩み続けることができるようにと犠牲を払って喜んでそのための助けや励ましを与えていこうとするのです。もちろんそのとき鍵になるのは、みことばでした。夫がそれぞれの知恵やこの世の考えに基づいてそのことを成していくのではありません。ただみことばによって、夫は妻を教導していこうとするのです。そうだとするなら夫は、どれだけ自分自身が聖書に親しんでいないといけなんでしょう？どれだけ夫はまず聖書を自分で学び、その真理を生きていないといけなんでしょう？当たり前と思うかもしれませんが、もしだれかを導こうとしているその者が、行き先を正しく知っていなければ大変な結果になることをわかっています。例えば山岳ガイドが山のことを全く知らなければ、それは大変なことになりますし、船長が航路を知っていなければ、それも路頭に迷うことになってしまいます。夫は妻のかしらでした。夫は妻を愛しているからこそ、妻の聖さを求めていくわけです。そこに鍵になるのは、みことばだったのです。だからこそ、パウロはコロサイ3章でこんなふうにも口にしていたのです。みことばはやはりずっと続いているのですが、パウロが16節で教えていたこと、それは、「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに

住ませなさい。」ということでした。みことばを自分のうちに蓄え続けていなさいと。それを学び、それに生きて行きなさいと。自分の考えや基準ではありません。キリストの考えやキリストの基準がいつも自分の考えや自分の基準となるようにキリストのことばをうちに蓄え続けて、蓄えたみことばによってその歩みを支配させていくのです。また、そのようにして自分だけがみことばを学ぶだけではなく、自分だけがみことばによって生きていくのではなく、その学んだみことばによって妻を喜んで導いていこうとするというわけです。妻がますます神様に喜ばれる女性として成長してことができるように、夫がみことばを通して教えてあげるのです。妻がますます妻として神様を喜ばせる者になれるように、夫はみことばを通して教えてあげようとするのです。妻が母として成長できるように、夫はみことばからそれを教えてあげようとするのです。真理によって励ましていこうとするのです。そんな聖さを生み出す愛こそ、キリストに見える最大の模範であり、夫にとっての大切な務めでした。

そうだとすると、そのような愛を日々実践しながら歩んでいるのでしょうか？妻を愛しているからこそ、皆さんが妻のことを心から気にかけておられるからこそ、その妻の霊的成長を何よりも望んで、そのために喜んでみことばから導こうとしているのでしょうか？そのための時間をみずから取ろうとしているのでしょうか？それとも自分がみことばを学ぶことを怠っていたり、また導くという神様が与えられた責任を拒んでいたりしないのでしょうか？RC・スプロールという先生も、夫の役割、またその影響の大きさに関してこんなことばを残していました。「結婚後、妻の人格と性格に最も大きな影響を与えるのは夫です。ある男性が私のところに来て、結婚してから妻は変わってしまったと愚痴をこぼす時、私はすぐにこう答えます。『誰が彼女を変えたと思いますか？』ある意味、男性が持つ妻は、自分が生み出した妻です。もし怪物がいるのなら、自分自身の本質を吟味すべきかもしれません。…夫は妻の霊的な幸福に責任を負っているのです。」このように私たちが見ていくときに、確かに神様は家庭の霊的リーダーに対して大きな責任を与えていました。妻の成長のために導いていこうとするのです。そしてこんな夫の務めは、到底自分の力ではできません。だからこそ神様の助けを祈り求めていくことです。妻のかしらとして、皆さんを夫として立てられた神様は、ご自身のみことばに従っていこうとする者を必ず助けてくださいます。そのようにして歩いていく助けを必ず与えてくださいます。だからその主の助けに拠り頼みながら、聖さを生み出すその愛をもって妻を愛していこうとすることです。それが私たちがキリストに見てとれる最高の二つ目の模範でした。

3. 目標：“妻を愛する”とは何のためなのか？

そして最後、皆さんと三つ目に考えたいのは目標です。これまで妻を愛することの意味と模範を考えしてきました。改めて大きな責任だと感じておられると思います。でもそのときによく考えてみてください。“妻を愛する”というのは、何のためにするのでしょうか？そのゴールはどこにあるのでしょうか？そのひとつの答えをエペソのみことばは教えてくれていました。さっき私たちが見た5章に戻って、その終わり31-33節でこんなふうに宣べていました。「:31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。:33 それはそうとして、あなたがたも、おのこの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。」ここですぐに気づかれたかと思います。パウロは創世記2:24のみことばをここ31節で引用していました。彼は創造主である神様が定めた結婚の始まりというものについて目を向けさせていたのです。デザイナーであられるその方が描いていた結婚のあるべき姿はどんなものなのか？31節に書いていました。「…人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」と。それがまさに結婚の始まりでした。それが神様の定めた結婚の姿だったのです。そしてそれを示した後で、パウロは続く32節でこのように言っていましたね。「:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。」と。パウロは何を言わんとしたのでしょうか？創造の初めから、結婚は夫と妻のふたりが一体となること以上の大きなものを表していた、ということでした。そこには大きなものがありました。

その大きなものというのは、キリストと教会の関係でした。結婚自体を考えると、それは豊かな祝福や幸せを私たちにもたらしてくれるものです。その通りです。でも忘れてはいけないことというのは、それがすべてではないということです。夫が妻を犠牲的な愛でもって愛して、そして妻が夫にみずから進んで従っていくなら、その姿というのは、まさにキリストと教会との関係を表すことになるのだ、キリストの福音を表すことになるのだ、とそう教えているのです。つまり結婚というのは究極的には、人の、ではなく、主の栄光が現されるためのものだったのです。主のものである結婚だからこそ、主を愛している信仰者は信仰者と結婚するということが欠かせないのです。なぜかと言えば、それは、今神様の敵として歩んでいるそんな未信者との結婚では、今私たちが見たキリストと教会の関係を明らかにすることができないからです。その結婚が、キリストの福音というものを明らかにするものにはならないからです。だからこそいろんなことを世が言っていたとしても、神様の最初の計画に従うことが大切でした。

でもそのようにして、かしらとして立てられた夫が喜んでみずからを与えるというその愛でもって妻を忠実に導いて妻の聖さ追い求めていくのであれば、助け手として与えられたその妻がそんな夫のリーダーシップにみずからへりくだって犠牲を払って仕えていくのなら、そこにキリストの教会に対する愛を、教会のキリストに対する服従を、はっきりと見ることができるということです。そして、そんな主にある夫婦関係こそ、間違いなく主が喜んでくださる、主の栄光を大いに現すことのできるものになるというわけです。夫が妻を愛するということが、妻が夫に従うということ、それはそれぞれにとって、とても大切なことでした。というのも皆さん、もしこのようにして夫と妻の関係がキリストの福音を表すものであるとすれば、逆に夫が妻を愛するということが拒むなら、その妻との関係はキリストの福音を表すことになっていない、ということです。本来なら結婚を通してキリストと教会の姿を見ることができるともかかわらず、夫が、妻が、その責任を果たそうとしないなら、主の栄光を奪うことに繋がるといいます。ですからこれは小さな問題ではありませんでした。だからこそ自分の歩みを一度振り返って考えてみてください。ぜひ夫婦で話し合うこともしてみてください。夫の妻に対する愛は、キリストの教会への愛を表しているものでしょうか？妻の夫に従うということは、教会のキリストに対する関係を表しているものでしょうか？

さて、きょう私たちはこのようにして、夫が妻を愛するということに関して、その意味と模範とそして目標を見てきました。間違いなく言えるのは、大きな責任だったということです。また忠実に歩いていこうとしても、そこには失敗や争いや罪の問題がいつい起らないわけではありません。夫が妻を愛そうとしてもそこに難しさは出てきます。妻が夫に従おうとしてもそこに問題は出てきます。でも少なくとも覚えていてください。すべてのデザイナーであられる創造主である神様は、私たちに重荷や問題を与えるために初めからこのようなかたちを計画したのではないということです。すべてをご存じであり、すべてをご自身の知恵でもって創造されるそのお方は、私たちにとってこれが最高の喜びをもたらすかたちであるからこそ、私たちにそのように与えられました、夫をかしらとして立ててくださいました。神様が妻を助け手として立ててくださいました。そのふたりが助け合うことが、そのふたりがひとつのものとして歩いていくことを通して、神様の栄光はますます明らかにされていくのです。だからこそ難しさを覚えるときは、みことばに戻ってください。キリストの愛を思い出してください。神様の創造の初めの計画を思い出してください。そしてそのみことばに立って、罪を犯せば悔い改めて、互いに愛し合いながら、主の栄光を現すそのような夫婦として、妻として、夫として成長していきましょう。